

研究可能テーマ

研究可能テーマ	研究指導者	受け入れ可能院生数
<p>(1) グローバルヘルスに関する研究</p> <p>2015年9月に持続可能な開発目標 (SDGs) が策定され、保健分野では「ユニバーサル・ヘルス・ガバレッジ」の達成が課題としてあげられています。</p> <p>グローバルヘルスの分野では、人口や疾病構造の変化による高齢化や生活習慣病の増大、エボラ出血熱などのパンデミックのような公衆衛生危機、医療費の負担をめぐる保健財政の諸課題、さらには貧困層や女性・障がい者といった脆弱な人々への健康アクセスや官民連携事業・ソーシャルビジネスの可能性など、グローバルな視点での課題解決の必要性とその基礎研究への期待が高まってきています。</p> <p>大学院では、健康格差の是正という課題に対して、システムの思考やデザイン志向の基づく研究テーマの設定と、途上国 (アジア・アフリカ) を中心とした実証検証を通して、社会的な変革を目指した新しいグランドセオリーの提案に資する研究成果を目指します。</p>	杉下教授	2
<p>(2) マラリア原虫の薬剤耐性に関する研究</p> <p>クロロキンをはじめとするマラリア治療薬に対する耐性原虫の蔓延は、マラリア制圧の大きな障害となっています。国際環境・熱帯医学教室では、対策を見据えた基礎研究を行っています。</p> <p>現在、耐性原虫がいつ頃出現したのか (過去推定) および今後どのように広がっていくのか (未来予測) の解明を目標に掲げています。この目的のもと、東南アジア、太平洋地域、アフリカの流行地における定期的な現地調査を行い、得られた原虫株の薬剤耐性関連遺伝子や中立座位の多型を分析しています。</p> <p>これらの結果は、集団遺伝学および分子進化学的手法を用いて解析し、原虫集団の多様性比較や集団の履歴推定を行っています。</p>	塚原講師 本間助教	2
<p>(3) 開発途上国における医療サービス利用に関する学際的アプローチ</p> <p>マラリアは世界の3大感染症の一つであり、有効な治療法があるにもかかわらず最近の推定死亡者は43.9万人に達しています。マラリアの死亡率を減らすためには、適切な医療サービスを支払い可能な額で提供し、住民だれもが実際に利用できるような継続的な仕組みが必要です。</p> <p>とくに住民が病気になる時、どのように治療を決定するのかを理解することが不可欠であり研究の中心課題となります。</p> <p>分析は疫学的手法が基本ですが、経済学、社会学、心理学、人類学領域の方法論も視野に入れた学際的な研究を目指しています。担当教員はパプアニューギニア農村部の集団において調査を15年以上続けており、データの蓄積があります。大学院生は、現地に長期滞在して住民を対象とした調査を運営し</p> <p>実証データ (インタビュー調査、生体計測、生体試料) を収集する技能、さらには大学で試料分析及び統計解析の技法を習得することが目標です。ここ数年、マラリア以外の急性感染症にも対象疾患を拡げており、さらには生活習慣病、栄養等も研究テーマとして選択できる可能性があります。</p>	塚原講師	1